

「ヌマンシア」の形成と多義性について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008202

「ヌマンシア」の形成と多義性について

大 原 志 麻

1. はじめに

「ヌマンシア」は、複数の領域に広がる表象である。文学の領域でまず想起されるのは、セルバンテスの『ヌマンシア』¹であろう。「1574年に編纂された『スペイン総年代記』²をもとに、スキピオの包囲による兵糧攻めにも屈せず、住民は捕虜にならないよう集団自決し、屍と灰燼と化したヌマンシアから勇将スキピオが得たものは何もなかったとする歴史的事実をもとに書かれた」という決まり文句を枕に紹介される戯曲である。1582年頃に執筆された『ヌマンシア』は、スペイン文化の中で、強者の暴虐と戦う民族の不屈の抵抗の偉大さを高揚する手立てであるとされてきた。

歴史研究における「ヌマンシア」は、ローマ帝国によるイベリア半島征服の過程で勃発した第二次ケルティベリア戦争における、紀元前133年のヌマンティア陥落³のことであり、シュルテンの記念碑的な研究⁴をはじめとして、多くの関心を集めてきた。中近世以降も、ヌマンツアは後のスペインの直接の先祖であるとされ、スペイン史の一環として解釈されてきた。このようなフランコ期のナショナリスティックな歴史学に対して、亡命したアメリカ・カストロが「ヌ

¹ Cervantes, M. de, *La Numancia* (trad. y notas de Sevilla Arroyo, F., y Rey Hazas, A.), Alianza Editorial, 1996. 邦語訳はミゲル・デ・セルバンテス「ヌマンシアの包囲」『スペイン黄金世紀演劇集』（牛島信明訳編）、名古屋大学出版会、2003年、20頁－70頁。ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ（岩根園和訳注）『ヌマンシア』大学書林、1990年。

² Morales, A. De, *La Cronica General de España que continuava Ambrosio Morales, natural de Cordova, Prosiguiendo delante de los cinco libros, que el Maestro Florián de Ocampo Cronista del Emperador don Carlos V, Alcalá de Henares, 1598.*

³ 「イベロ人にもケルト人にも、ストラボン時代にあった若干の特質は今日もお認められ得る。寛大さ、堂々とした風采、尊大さ、とりわけ自由を愛すること、これは征服者に対する恐ろしいくらしい抵抗と、包囲された町を狂信的に防衛することで示された。サグントゥムとヌマンシアとは、スペイン史のいくつかの有名な包囲戦の長いリストのはじめを飾っている」。トレンド（丹羽光男訳）『スペイン文明史』みすず書房、1970年、10頁。

⁴ Schulten, A., *Historia de Numancia*, Pamplona, 2004, p. XVIII.

マンシア人やビリアート、テオドシウス帝や西ゴート人をスペイン人と呼んでいるとしたら、それは単に歴史学上の根本的異常性の前触れであり、スペイン人の集団的意識は、空想的なまやかしによって養分を得ていて、現実的対象を欠いている」⁵と批判する有名な議論もある。文化人類学では、カロ・バロッハが「私たちが栄えある戦争と思っているものは、当時全く異なるモラルで戦われたもの」⁶とし、ヌマンシアと今のスペイン人との遺伝的な連続性を否定している。言語学でのヌマンシアの陥落は、ローマによるイベリア半島の植民地化に根本的な重要性を持つもので、イベリア半島におけるイベリア語からローマによるラテン語化⁷の過程において必ず挙げられる重要な転機である。

ヌマンシアが関心を集め、知名度を高めてきたことについて、文学研究では専ら16世紀末のセルバンテスの功績が強調されており、セルバンテスが戯曲を書かなければヌマンシアは忘却され、セルバンテスゆえにヌマンシアの名が不朽のものとなった⁸とされている。しかし、演劇が最盛期を迎えるスペイン文学の黄金時代に、舞台上に乗らず、台本原稿を依頼する座主もないような戯曲にどれほどの価値があっただろうか⁹、といった批判もまた広範に共有されている。

文学研究におけるセルバンテスを軸にした作品論のみでは、ヌマンシアの持つ広がりを理解できない。作家としてのセルバンテスが高く再評価され、翻訳などが広まり『ヌマンシア』が周知された功績は大きい。しかし、『ドン・キホーテ』の成功によりセルバンテス作品全体の再評価が進み『ヌマンシア』が印刷され、世に知られるようになったのは18世紀のことであり、200年近く評価されず忘れ去られていたことも看過できない。またヌマンシア人とスペイン人との連続性や断絶の正否をめぐる議論、そしてヌマンティア戦争の事件史としての枠組みでの研究では、スペイン文化史において「ヌマンシア」の持つ悲劇や伝説の力、今日に至るスペインの共同体の心理構造における機能の全体像について明らかにすることはできない。『ヌマンシア』がセルバンテスのいわば影の作品であるにもかかわらず、知名度が高いというギャップには、セルバンテスのみに帰着しない、「ヌマンシア」表象形成の伝統的な流れがある。

⁵ アメリコ・カストロ（本田誠二訳）『スペイン人とは誰か。その起源と実像』水声社、2012年、96頁。

⁶ Caro Baroja, J., *Interpretaciones de la Guerra de Numancia. Discurso leído el día 24 de febrero de 1968*, Madrid, 1968, pp.12-13.

⁷ Elcock, W.D., *The Romance Languages*, Faber & Faber, 1975（エルコック、W.D.（大高順雄訳）『ロマン語：新ラテン語の生成と進化』学術出版会、2009年、184頁）。

⁸ 野呂正「ヌマンシア瞥見」『イスパニア図書』7、133-140頁、138頁。

⁹ 岩根園和「セルバンテス：『ヌマンシア』の韻律について」人文学研究所報、24、1-11頁、1頁。

歴史学研究では、1960年以降本格的な発掘調査が進み、ヌマンシア博物館が整備され、それに伴い史実としてのヌマンシアをテーマとした研究も活発となってきた。ヌマンティア戦争についての詳細な史実が明らかにされていく中で、先史時代を専門とするコンブルテンセ大学のアルフレド・ヒメノやホセ・イグナシオ・トレによって、ヌマンティア戦争解釈の歴史についてのまとまった研究も発表された¹⁰。



ヌマンシア博物館と所蔵されているケルティベリアの戦士（2012年筆者撮影）

本稿では、スペインにおける考古学研究の成果を基にまだあまり知られていないヌマンティア戦争の概要をまとめ、歴史上の一事件がどのように翻訳され、解釈を重ね続けられることで「ヌマンシア」の意味するところが確立したのかについて考察する。これにより、複数の研究領域の境界線上にあり、関心を集めてきたにもかかわらず、視点が分かれ実態が掴めなかった「ヌマンシア」というスペイン文化の一側面が明らかとなるだろう。

2. ヌマンティア戦争（*Bellum Numantinum*）

「ヌマンシア」表象の起源である、紀元前153年から155年のヌマンティア戦争とは、執政官格総督プブリウス・コルネリウス・スキピオ・アエミリアヌスと、ローマとの条約違反により、セゲダ族が避難したアラウァキ族の中心であるヌマンティアとの間の戦争のことである。包囲戦によるヌマンシアの陥落が、ローマ帝国によるイベリア半島征服の大きな区切りとなったとされている¹¹。ここ

¹⁰ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *Numancia, Símbolo e Historia*, Madrid, 2005.

¹¹ ビセンテ・ビーベス（小林一宏訳）『スペイン—歴史的省察』岩波書店、1975年、21頁。以後のカンタブリア、アストゥリアスの平定にさらに100年かかるにしても、それはもはや戦争というよりは、治安警備活動だった。

では、事後のアダプテーションにおける要点を念頭に、まだあまり我が国で紹介されていないヌマンティア戦争を概観する。

ヌマンティア戦争関連年表¹²

年	事 件	内 容	表 象 と の 関 連
紀元前 195年	大カトーによるイベリア半島平定	アウルス・ゲッリウス「ローマの執政官が城壁の前にいた」	ヌマンティアへの最初の言及
紀元前 178年	ティベリウス・センブリウス・グラックスとケルトイベリア人の条約締結	双方の合意により、ケルティベリア族は、ローマの同意なしの都市の設立の制限、租税、ローマ軍への援助が義務づけられる。ローマ帝国の優位を認める代わりに、ケルティベリアの経済行政面での自由と独立が承認。	後日条約の有効期限に関する認識の齟齬（ケルティベリア側は不特定の期日まで、ローマ側はイベリア半島支配拡大が可能となる時まで）が戦争の原因となる。
紀元前 154年	ベリ族の都セゲダが城壁構築にとりかかり、ローマが条約違反を咎める。	新しい都市建設ではなく、既に存在しているものを防備し広げているだけだと主張。ローマは、ケルティベリアにおける人口集中と、戦略的、政治的な脅威となりうる可能性から宣戦布告。執政官クイントゥス・フルウィウス・ノビリオルが、違反への制裁のためヒスパニアに派遣。	ローマとの条約が破棄
紀元前 153年	クイントゥス・フルウィウス・ノビリオルが3000の軍隊をセゲダへ派遣	セゲダ人がヌマンシアへ避難。ノビリオルは、ヌマンティアを拠点とするアラウァキ族などにより大きな損害を被る。	ヌマンティアがケルティベリアの抵抗の中心地となる。ローマ軍は「見下げて果てた日」となる被害を蒙る。ローマ軍半数以上とワシや旗印が奪われローマの優位に疑義。ケルティベリアの勇気と寧猛さの噂とヌマンシアへの恐怖が広まり戦意喪失。
紀元前 152年	執政官マルクス・クラウディウス・マルケルスがノビリオルより指令権を引き継ぐ。	アラウァキ族の使節は一步も譲らず互角であることを主張。マルケルスがハロン溪谷とオキリスとネルトブリガの都市を再征服し、ドゥエロ川のアラウァキ族に対し、グラックスとの条約を再確認。	元老院により和平が評価されず、スキピオが属する党派の意向を受けてケルティベリア戦争の布告する。
紀元前 151年	スキピオとケルティベリア人の一騎打ち	執政官ルキウス・リキニウス・ルクルスはアラウァキ族の西方に住むインテルカティアの城砦を包囲したとき、場内からひとりのケルティベリア人が歩み出て、ローマ将兵との一騎打ちを申し出た。スキピオがそれに応じた。一騎打ちはスキピオの勝利に終わり、講和が成立。	スキピオの一騎打ち
紀元前 147年	ウィリアトウスによるルシタニアの蜂起	ローマの執政官ガルバの虐殺に対する反乱。	ゲルマンのアルミニウス、ガリアのウェルキングトリクスと並び、ヒスパニアのバリアートが後世のヨーロッパにも影響を及ぼす。

¹² Schulten, A., *op.cit.*, Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』4、京都大学学術出版会、2013年、パテルクルス（西田卓生訳）『ローマ世界の歴史』京都大学出版会、2012年をもとに作成。

年	事 件	内 容	表 象 と の 関 連
紀元前 144年	ヌマンティア戦争開始	ローマ側の敗戦が続く	ヌマンシアの「ローマに懸念を起こす力」が認められる。ローマ側の英雄の待望。
紀元前 139年	ポンペイウスによる講和	ローマに不利な条件での休戦協定	スキピオによる主戦派が「恥と不名誉」であると批判。
紀元前 139年	マンキヌスの降伏	20000人のローマ兵を救うための講和	戦争回避の「怯情」のため、マンキヌスが裸になり両手を後ろ手で縛られ、軍事祭官に伴われてヌマンティアに引き渡されるが、ヌマンシアは受け入れを拒否。
紀元前 134年 1 月	例外措置によりピブルリウス・コルネリウス・スキピオ・アエミリアヌスが執政官格総督に就任	ヌマンティア戦に向けて軍隊再編	兄弟のファビウス・マクシムス、甥のプテオン、ガイウス・マリウス、ガイウス・グラックス、ガイウス・メンミウスやヌミディアの王子ユグルタなどで「友人の歩兵隊」を構成。さらにポリュビオスなどを連れて行くことで、(「老いも若きも同じようなものは見たことない」と恐怖が支配した) Bellum Numantinumについての歴史叙述の基盤ができる。
紀元前 134年 春	スキピオが軍隊の風紀改善	商人や娼婦、敗北の不安と恐怖から兵に重用されていた呪術師を追放。兵を再び禁欲に戻し、食事制限し、オープンや。青銅の蓋付き鍋やコップ以外を持たせないようにした。	『ヌマンシア』第一幕へ
紀元前 133年 春	レトゲネス（カラウニオ）と5名の同伴者や若者が包囲を抜けて援軍を求め。	ルティアの若者のみ救援に応じるが、老人たちによる密告でスキピオにより400人の若者の両手が切られ、その父と兄弟が同様に処断される。	カラウニオがローマとの交渉役
	ヌマンティアによる講和の要請。	ヌマンティア側が5名の使者をスキピオに送り、祖国のために戦った勇気ある都市への慈悲と名誉ある講和を要請。スキピオは、無条件降伏のみを突き付け、武器を引き渡すことを要求。	5名の使者はヌマンティアにより都市の利害よりも身の安全を優先した謀反の咎で殺される。
紀元前 133年 夏	ヌマンティアの陥落	ヌマンティア内でのカニバリズムで表現される極限状態。降伏を選んだ者は武器を渡した後、命令された場所に赴いた。屈服よりも自決を選んだ者は、死の準備のためにもう一日の猶予を求めた。	ヌマンティア人が残っていた物を焼いたため、大きな略奪品はなく、スキピオは私財を投じて兵に7デナリウスづつ支払う。以降20年間イベリア半島でローマに対する蜂起は起こらない。ポリュビオス、アププリウス・ルティリウス・ルフス共に生存者を確認。
紀元前 132年	スキピオのローマ凱旋	「アフリカヌス」に加え「ヌマンティア」のスキピオの綽名	ヌマンティア人の生存者の中から50名選び、残りを売り払った。

ヌマンティアについての最初の記述は、紀元前195年に元老院が大カトーをヒスパニアでの反乱の鎮圧及びケルティベリアの内陸部平定のため、執政官に任

命された文脈においてである¹³。次によく知られているのは、紀元前178年にアラウァキ族を含むケルティベリアが、法務官ティベリウス・センプロニウス・グラックスと交わした条約¹⁴においてである。これは、ローマの同意なしに新たな都市を建設することが禁じられ、貢納と兵力供出が義務付けられるものであるが、ローマ帝国の優位を受け入れる代わりに、経済的・行政的に独立した自由な組織を認められるというものであった。ローマ側は、この条約がイベリア半島への勢力拡大が可能となる時まで有効であると理解していた¹⁵。ベリ族の都セゲダが、ローマの承認を得ずに城壁構築にとりかかった際、ローマはこれを条約違反であると考え、紀元前154年第二次ケルティベリア戦争¹⁶が始まる。紀元前153年に、執政官クイントゥス・フルウィウス・ノビリオルが派遣され¹⁷、セゲダ人が避難したヌマンティアと戦った¹⁸。

ノビリオルは、軍を再編しヌマンティアから東6キロの二つの川に挟まれた、奇襲を試みるのによい丘に野営して、エプロ川を通してヌミディアのマシニッサ王から300の騎兵と10匹の象を受け取った。ヌマンティア人はこれまで見たことのない象に大混乱した。しかし一匹の象がヌマンティアの城壁からの投石により頭を負傷し暴走したことで、残り9匹の象が反転してローマ兵を踏み、軍を混乱させた。ケルティベリアは、隊列に乱れが生じたのを利用して、3匹の象と4,000人以上のローマ兵を殺し、多くの旗やワシ、武器を手に入れた。この結果セゲダ族のカキロ¹⁹を長としたケルティベリア連合軍が戦いに勝利し、6,000人のローマ軍が投降し、ローマ将校は戦闘意欲を喪失した。ローマ軍の大敗により、ローマに属州のヌマンティアへの恐怖が広がり、ローマの優位に疑義が持たれた。紀元前152年にノビリオルは、クラウデウイス・マルケルスにより罷免され²⁰、彼が敗戦したローマ暦8月23日は「見下げ果てた日」²¹と呼ばれるようになった。

¹³ Hernández Guerra, L., *Pueblos preromanos y romanización de la provincial de Soria*, Soria, 2005, p.121.

¹⁴ ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』4、京都大学学術出版会、2013年、351頁。

¹⁵ Mangas, J., *De Aníbal al emperador Augusto: Hispania durante la República romana*, Madrid, 1995, p.144.

¹⁶ Burillo Mozota, F., *Los Celtíberos. Etnias y estados*, Madrid, 2008, p.301.

¹⁷ Apiano, *Sobre Iberia y Aníbal* (trad.y notas Gómez Espelosín, F.J.), Madrid, 2014, pp.108.

¹⁸ Apiano, *op.cit.*, pp.106-107. ポリュビオス、前掲書、351頁。

¹⁹ このケルティベリアの名には複数の碑文があるが正しくは“Caciro”である。Apiano Alejandrino, *Sobre Iberia y Aníbal* (trad.y notas Gómez Espelosín, F.J.), Madrid, 1993, p.45.

²⁰ Apiano, *op.cit.*, 2014, pp.109-112.

²¹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.13.

3年前に執政官の任を終えたばかりのクラウデウィス・マルケルスは紀元前152年に執政官に着任し、ハロン溪谷、オキリス²²とルソニ族のネルゴブリゲを再征服し、それを背景に対等な条件によるアラウアキ族との和平交渉を整えた²³。マルケルスは元老院の許可を得ずに、ヌマンティア人を包囲し、グラックスの条約を更新し、戦争を終結させようとした²⁴。しかしマルケルスは、小スキピオの党派により、戦争を臆病さによって回避し、ローマの同盟者や利益よりも敵に味方したと責任を追及された²⁵。元老院は和平の提案を退け、小スキピオが属する古くからの反マルケルス強硬派の意向を受けて、ケルティベリア戦争を推し進めた。

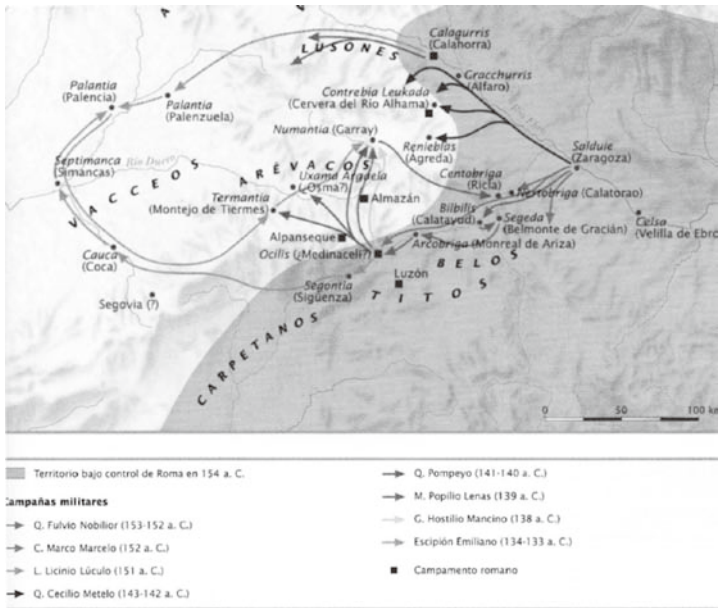


図1 第二次ケルティベリア戦争（紀元前153－133年）²⁶

²² 現在のメディナセリ。Apiano, *op.cit.*, pp.112.

²³ Apiano, *op.cit.*, pp.113.

²⁴ Apiano, *op.cit.*, pp.114.

²⁵ Apiano, *op.cit.*, pp.115. ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』4、京都大学学術出版会、2013年、353頁。

²⁶ García de Cortázar, F., *Atlas de Historia de España*, Barcelona, 2003, p.71.

ケルティベリア戦争中の紀元前151年に、新執政官ルキウス・リキニウス・ルクルスが選出された。ルクルスはイベリアに到着するなり、抗争していたわけでもないアラウアキ族の西方に住むウァッカエイ族の領域に攻め込み、その中心カウカを攻略した²⁷。インテルカティア²⁸を包囲したとき、職位は定かではないが副司令官であったとされる小スキピオが、ケルティベリア人の要請で一騎打ちをし、小スキピオが勝利している²⁹。

同時期のルシタニアでは、紀元前151年度の法務官格総督に任命されたセルウィウス・スルピキウス・ガルバが、ルシタニア人の反乱を鎮圧するために、イベリア半島に遠征したが、7,000人のローマ兵が戦死する敗北に終わった。しかし戦勝にもかかわらず、ルシタニア人の方から、翌年ガルバに和平を申し入れ、彼らの降伏と引き換えに、ローマがより豊かな土地を提供することで和平が成立した。ところが、ルシタニア人が新たな土地に到着すると、すぐに武器を取り上げられ、囲いの中に入れられ、8,000人が虐殺された。その中からウィリアトゥスという名の羊飼いが虐殺を逃れ³⁰、紀元前147年にルシタニア人の反乱のリーダーとなった。紀元前145年に執政官となった小スキピオの兄クイントゥス・ファビウス・セルウィリアヌス³¹は、ウィリアトゥスに惨敗し、ルシタニア軍に包囲された。しかし、ウィリアトゥスが思いがけず講和に応じたため、最悪の事態は免れることができた。ウィリアトゥスは交渉のために信頼する友人であるアウダックス、ディタルコンそしてミヌロの3名をローマ陣営に派遣した。しかしファビウス・セルウィリアヌスの兄弟で紀元前140年の執政官だったグナエウス・セルウィリウス・カエピオは、セルウィリアヌスによる協定がローマにとって不名誉と考え、ウィリアトゥスとの再交渉を装いながら、3人に莫大な報酬を提示し、紀元前139年に彼らが就寝中のウィリアトゥスを殺害した³²。こうして紀元前147年から始まったルシタニア戦争が終結する³³。暗殺が成功しても3名には報酬は支払われず、ローマはイベリア半島にまたひとつ不名誉なエピソードと残すこととなった³⁴。

²⁷ 現在のコカ。Apiano, *op.cit.*, 2014, pp.117.

²⁸ 現在のパレデス・デ・ナバ。Apiano, *op.cit.*, pp.115.

²⁹ ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』4、京都大学学術出版会、2013年、357頁。Apiano, *op.cit.*, 2014, pp.119.

³⁰ Apiano, *op.cit.*, pp.126-129. フィリップ・マティザック（本村凌二監修）『古代ローマ歴史誌 7人の王と共和政期の指導者たち』、創元社、2004年、163-164頁。

³¹ Apiano, *op.cit.*, pp.133.

³² 西田卓生、高橋宏幸訳『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会、2012年、36頁。

³³ Burillo Mozota, F., *op.cit.*, p.303.

³⁴ Apiano, *op.cit.*, pp.141.

紀元前143年に執政官となったクイントゥス・カエサリウス・メテッルスがケルティベリアでの戦争を再開した。ウェッカエイ、ネルトブリガ、セントブリガ、コントレビアや様々なアラウアキ族の居住地を征服し、2年を費やしてキテリオルを平定し、残るところはテルマンティアとヌマンティアとなった³⁵。

紀元前141年に指揮権を引き継いだクイントゥス・ポンペイウスは、30,000の歩兵と2,000の騎兵を指揮し、およそ8,000人のヌマンティアに対峙したため「特に劣った相手」に対して優位にあると考えていた³⁶。しかし、ヌマンティアは、奇襲をかけ、敵を自らに有利な場所へ誘引し、ポンペイウスは敗退した。ポンペイウスは、ヌマンティアよりも征服が容易であると考えたテルマンティアへ遠征した。ポンペイウスは任期を延長し、再びヌマンティアへ戻ったが、前回の経験から直接対決を避け、メルダンチョ川の流れをかせ、飢餓に陥れる包囲戦へと切り替えた³⁷。しかしローマ兵は再び多くの戦死者を出した。ポンペイウスはローマからの援軍にもかかわらず、ヌマンティアに対して最終的になにも戦果を挙げることができなかった³⁸。紀元前139年にポンペイウスは、名誉回復のため元老院の同意なしにヌマンティア人と秘密裏に交渉し、武装解除と降伏を要求した³⁹。しかし小スキピオは、ポンペイウスが自分の名誉回復に好都合な和平を結んだことを批判し、元老院もこの和平を無効とした。翌紀元前138年小スキピオは、ヌマンティアの城壁を前に陣取り、前任者たちの戦略を変え、奇襲に梯子を活用した。しかしスキピオは潜伏していたヌマンティア人に気付かず、大きな損失を被り、ハロン溪谷まで後退した。ケルティベリアの隣接する部族であるルソニも攻撃したが戦果はなく、これらについてローマ帰還後紀元前137年にガイウス・ホスティリウス・マンキヌスにより暴露されている⁴⁰。

紀元前137年にガイウス・ホスティリウス・マンキヌスが執政官となり⁴¹、スキピオ・アフリカヌスの孫でティベリウス・センプロニウス・グラックスの息子である財務官ティベリウス・グラックスがこの軍団に入った。マンキヌスは、

³⁵ Apiano, *op.cit.*, p.147.

³⁶ Apiano, *op.cit.*, p.148.

³⁷ Apiano, *op.cit.*, p.150.

³⁸ Apiano Alejandrino, *op.cit.*, p.78.

³⁹ Apiano, *op.cit.*, p.151. 三頭政治を行った大ポンペイウスの子孫で、恥ずべき協定を結んだが、その無双の偉大なる名と権勢により罰せられなかった。西田卓生、高橋宏幸訳『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会、2012年、38頁。

⁴⁰ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.17.

⁴¹ この年から執政官が戦争シーズンの到来とともに戦場に到着できるように暦が修正され、現在の1月1日が年の始まりとなった。Rodríguez González, J., *La Resistencia Hispana contra Roma*, Madrid, 2010, p.242. Apiano, *op.cit.*, p.152.

包囲戦ではなく平原地域で戦おうとしたが、ヌマンティアへの援軍が到着したとの偽の知らせに驚き、ノビリオルの17年前の野営地に逃げた⁴²。しかし、この皆は劣化しており使えず、司令官はヌマンティア人に包囲された。ローマ軍には和平を求める以外に道がなかったが、ローマに何度も騙され、約束を破られてきたケルティベリアは、交渉に簡単には応じなかった。ところが、ローマ軍にセンプロニウス・グラックスの息子がいると知ると、その人物を交渉役に立てるなら話し合いに応じると告げてきた。こうしてティベリウスの働きで和平が成立し、対等の講和（*foedus aequum*）により、ヌマンティアの自治を認める代わりに、包囲された20,000人のローマ人を救うことができた。ティベリウスは、武器とともに財務官として携えていた会計帳簿を失くしていたが、後日、帳簿を取り戻すためヌマンティアに赴いたところ、無事に帳簿を返却されただけではなく、歓迎を受けた⁴³。

しかし、こういった紀元前137年のティベリウスやマンキヌスによる講和はローマで最も恥ずべき卑劣な手段であるとされた。マンキヌスは、ローマの利益を至上のものとするための栄光、略奪、勝利をよしとするスキピオ派によって糾弾された。スキピオは、この不名誉な和平を拒否するよう元老院を説き伏せることに成功した。ティベリウス・グラックスは義兄であるスキピオに保護され、世論にも支えられ罰せられなかったが、マンキヌスは「恥と不名誉」の唯一の責任者であるとし、敗北の罪を被せられた。マンキヌスは紀元前136年の執政官ルキウス・フリウス・ピルスにより、懲罰としてヌマンティアとの講和を果たせなかったマンキヌスに対し復讐させるべく、ヌマンティア人に裸で両手を縛られ引き渡された。しかしパテルクルスによれば、ヌマンティアの慈悲により「講和の公の破棄と不誠実さは、一人の人間の血で洗い流されるものではない」と、日が落ちるまでには野営に戻された⁴⁴。マンキヌスはローマに帰還した後、市民権を取り戻し、法務官となった。平民派は、彼の行動が20,000人のローマ人を救った名誉ある行動であるとし、その行為は記念碑的にローマで記憶され続けた⁴⁵。

ヌマンティア戦争をめぐり、ローマで人々が予想より長引く困難な戦争に疲

⁴² Apiano, *op.cit.*, p.153.

⁴³ Rodríguez González, J., *op.cit.*, pp.252-253.

⁴⁴ Apiano, *op.cit.*, p.156-157. 紀元前321年ローマがサムニテスに大敗北を喫したカウディウムの戦いの場合のように、ヌマンティア人はマンキヌスの受け入れを拒否した。西田卓生、高橋宏幸訳『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会、2012年、36頁。

⁴⁵ Purcaro, *Vida de Tiberio Graco*, 5, 6 (citado en Rodríguez González, J., *op.cit.*, p.252-253.)

弊し、懸念が広がる中、ただ一人ヌマンティアに勝てる人物であるという考えから、スキピオ・アエミリアヌスが、紀元前135年の執政官であったピソに替わって、紀元前134年1月1日からの執政官格総督⁴⁶として赴任した。小スキピオは、シチリアにおける奴隷の反乱などのため、元老院から期待していた援助を受けることができず、ケルティベリアへの恐怖が生じたことで、徴兵が忌避され、初めて籤引きによって徴兵されることとなり、従軍期間も6年に短縮された⁴⁷。そのため小スキピオは、紀元前145年に執政官だった兄弟のクウイントゥス・ファビウス・マクシムス・アエミリアヌス、ガイウス・マリウス、ガイウス・グラックス、ヌミディアのマシニッサ王の孫ユグルタ⁴⁸、ガイウス・メンミウスによる「友人の歩兵隊」、さらに、セレウコス朝シリアのアンティオコス7世、ヌミディア王ミキプサ、ペルウガモンのアッタロス3世らの個人的なつながりによって派遣された志願兵と自分の500人の隷属平民を連れて行かなければならなかった。また、詩人のルキリウス、親友であった歴史家のポリュビオスも随行した⁴⁹。

スキピオは前任者たちによって続いた敗北により、敗戦の恐れに硬直し風紀の乱れた軍隊の風紀を正し、卜占の道具や生贄を破棄させた。必要なまぐさや穀物を補給し、ヌマンティアが補給できないように余剰は焼いた⁵⁰。また、ヌマンティアと対立するほかのケルティベリアの部族と同盟し、70,000人の軍隊を準備した⁵¹。

続いて二つの野営地を築き、ヌマンティアの周囲に二重の塹壕の城塞を延ばし、包囲の準備をした。ヌマンティアの周囲24スタディオンの倍以上の50スタディオン（約8 km）の塹壕と防禦城壁を守備兵が昼夜問わず巡回する中、ヌマ

⁴⁶ Apiano, *op. cit.*, p.157. 小スキピオ（185年頃－129年）は、前147年と前134年と二度まで執政官に選ばれたとされるが、134年は実際には *procónsul*（執政官格総督）であった。『キケロー選集』9（中務哲郎、高橋宏幸訳、岩波書店、1999年、70－71頁。通常財務官、造営官、法務官と名譽ある公職の階梯をのぼり、43歳を過ぎて執政官に選任されうるものが、小スキピオは前147年の造営官に立候補しようとして、法廷年齢より前に36歳で執政官に選ばれ、アフリカに派遣され、第三次ポエニ戦争に決着をつけたことで、祖父が55年前につけられたアフリカヌスの称号を得た。その功により帰国後元老院の一員となる。紀元前142年には監察官に選ばれた。前134年は再任を妨げる法がわざわざ改正され着任した。その際前146年にカルタゴを滅ぼし、2回目には大カトーをはじめ数々のローマ将軍の攻撃を退けた反ローマ抵抗勢力の拠点ヌマンティアを前133年に滅ぼした。西田卓生、高橋宏幸訳『ローマ世界の歴史』京都大学学術出版会、2012年、43－44頁。

⁴⁷ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op. cit.*, p.14.

⁴⁸ Apiano, *op. cit.*, p.163-164.

⁴⁹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op. cit.*, p.19.

⁵⁰ Apiano, *op. cit.*, p.159.

⁵¹ Apiano Alejandrino, *op. cit.*, p.91.

ンティア人はローマ兵を挑発し、奇襲をかけた。紀元前133年に乏しい機会を利用して、ローマの包囲を抜けて救援を頼みに、カラウニオスと綽名されるレトゲネスをはじめとする5名の若者が外へ抜け出した。他の部族にことごとく背を向けられたが、ヌマンティアから300スタディオン（約55キロ）のルティア⁵²の若者たちのみが、ヌマンティアの頼みを聞き入れた。このことが耳に入るなり、小スキピオはルティアを包囲した。ローマの報復を恐れた老人たちは400名の若者を引き渡し、みせしめとして両手が切り落とされた⁵³。

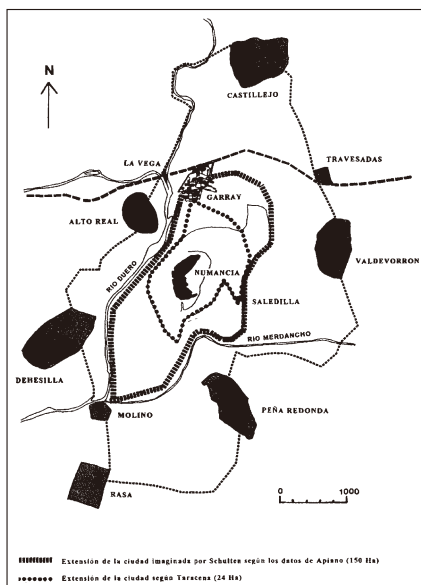


図2 紀元前133年のヌマンティア包囲⁵⁴

11か月の孤立と飢餓で限界に達したヌマンティア人は、アウアルスを頭とする5名の使者を送り、小スキピオと交渉しようとした。しかし捕縛した囚人から、ヌマンティアが極限状態にあることを聞いていた小スキピオは、無条件降伏のみをつきつけ武器を引き渡すよう要求した。ヌマンティアは、アウアルスたちが都市の利益よりも身の安全を優先したと考え、殺害した⁵⁵。ヌマンティア人のうち、ある者はスキピオへ投降することを選び、武器を渡し、指定された場所に赴いた。他の者は、ローマへの隷属よりも自決を選び、死の準備のためにもう一日の猶予を申し出た⁵⁶。ここで、民族としてのアラウァキ族は滅亡した。

同年夏にヌマンティアが陥落する際、もともと富の乏しいヌマンティアだったが、ローマが戦利品を得られないよう、全てが焼き払われた。そのため、小スキピオは私財から7デナリウスを兵に支払った。マケドニアやアジアの征服

⁵² 現在のブルゴス・デ・オスマ。Apiano, *op.cit.*, 2014, p.168.

⁵³ Apiano, *op.cit.*, p.169.

⁵⁴ シュルテンとタラセナにより提示された図。Jimeno Martínez, A., Tabernero Galán, C., “Origen de Numancia y su evolución urbana”, *Complutum Extra*, 6, p.419.

⁵⁵ Apiano, *op.cit.*, p.170.

⁵⁶ Apiano Alejandrino, *op.cit.*, p.97.

戦争で、戦利品から兵に1,500デナリウス支払われたことを鑑みると、ヌマンティア戦争の勝利は名目的なものであった。紀元前132年にローマに凱旋した際、小スキピオは、50名のヌマンティア人を選出して連行し、残りは売り払った。スキピオはこの遠征の後、「アフリカヌス」に次いで、「ヌマンティヌス」という非公式の称号も獲得した⁵⁷。ヌマンティアの最期は凄惨で、以後他のいかなるイベリア半島の村邑もローマに蜂起しようとはしなかった⁵⁸。

3. ローマ帝国におけるヌマンティア解釈

ヌマンティア戦争についての直接の史料は、小スキピオに随行したポリュビオスによるもののみである。ポリュビオスをもとにアッピアノスが全体像を再構築し、そこから、衰退期のローマ帝国のおかれた状況に光を与えるため概ね内容の一致するフィクションが形成された。この時期の叙述は史料的には無価値とされ、ヌマンティアは史実の領域を後にし、伝説となっていく。以下では、歴史的事実の隣で、「語られる過去」であるヌマンティアが、どのような主観的解釈に晒され、再構築を重ねられたかをみていく。

1～2世紀のヌマンティア戦争叙述の主旨は、ケルティベリアへの恐怖、ローマの優位性、軍事行動が野蛮に対する文明化の性格を伴っていたことによるヌマンティア戦争の正当化などである。まず、ケルティベリアへの恐怖を表す「苛烈な戦争・不敗のヌマンティア」について、同時代のポリュビオスは、ヌマンティア戦争が20年間続いた「火の戦争」で「他に例のない激しい戦争で、いつ果てるともなく続いた」⁵⁹と記している。紀元前45年ごろキケロは「いかなる勢力よりも脅威」であり、1世紀のプルタルコス「ヌマンティアは無敵であると判断されており、多くの将軍たちに勝利し、征服されることはなかった」と無敵であったとしている。1世紀にパテルクルスは「ウィリアトゥスが殺されると、今度はヌマンティアで一層深刻な戦争が燃え上がった」⁶⁰と述べている。2世紀のアッピアノスは、「幾度の敗北をローマに与えたことか」「カルタゴとヌマンシアはローマが屈服させるに最も困難な都市」で「帝国にとって最も激しい敵」⁶¹であると評した。また、キケロは、「ローマの覇権にとっては最大の敵で

⁵⁷ フィリップ・マティザック（本村凌二監修）『古代ローマ歴史誌 7人の王と共和政期の指導者たち』、創元社、2004年、169頁。

⁵⁸ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.24.

⁵⁹ ポリュビオス（城江良和訳）『歴史』4、京都大学学術出版会、2013年、350頁。

⁶⁰ 『ローマ世界の歴史』（西田卓生、高橋宏幸訳）、京都大学学術出版会、2012年、36頁。

⁶¹ Apiano Alejandrino, *op.cit.*, p.97.

あった二つの都市（カルタゴとヌマンティア）を滅ぼすことにより、今ある戦争のみならず将来の戦争をも終熄させたのだ」とし、根絶の戦争と呼んでいる⁶²。

「長期にわたる強者対弱者の不当」な戦争に関して、ポリュビオスとストラボン紀元前151年から143年の休戦期間を数えずに、カルタゴ以上に戦争が長い間継続したことを強調している。1世紀にセネカも同様にカルタゴと比較した上で「ヌマンティアを巡り長い間決着がつかず、その憤激に耐えた。ヌマンシアの陥落にはカルタゴ以上に時間がかかったのではないだろうか」と長期にわたった点を強調している。2世紀のフロルスは、「勝利は名ばかりのものだった（*Triumpnus fuit tantum de nomine*）」とし「14年の間にたった4,000人のケルティイペロが4万人の軍隊との戦いを継続し、抵抗しただけではなく大きな損害を与えた」と10対1の軍勢の差を強調し、「彼らだけの力で、全ての世界を支配した国家にかくも長い間抵抗したこの勇敢で幸運な都市を、同じ逆境において称賛する」⁶³と称えている。またヌマンティア人との対立の発端をローマが始めた攻撃であるとみなしており、ケルティベリア人は同盟していたセゲダ人を助けただけで「それは戦争の理由としてもっとも不当である」⁶⁴としている。アッピアノスは「およそ8,000人だけで、その信義のためにローマ人を重大な窮地に立たせたのである」、「弱者対強者の不公平な戦争」⁶⁵と少数であることと抵抗の能力、多くの軍事行動と抵抗が長きにわたったことを特筆した。パテルクルスはヌマンティア人を10,000人としているなど、著述家により数値的に不均衡がみられるが、7.5ヘクタールという小さな都市であることから、ローマ帝国との軍事的な差は容易に想像できる。

「城壁の有無」は、ヌマンシアが無防備都市だったか否かの点で「不当な戦争」の議論の焦点となる。1世紀にストラボンが「包囲されたヌマンティア人は、城壁からの数人の投降者を除いて最後まで確固たる姿勢を貫いた」とし、城壁と生存者の存在に言及している。1世紀のセクストゥス・ユリウス・フロントニウスは、「ヌマンティア人は砦を準備し、攻撃中城壁から降りてきた」と城壁に守られていたと主張している。2世紀のアッピアノスは「ノビリオルは城壁に象を放った」「ヌマンティアへのアクセスは困難で、二本の川、断崖と深い森に囲まれている。平野に続く道のみがあるが、そこは溝と柵でいっぱい

⁶² 『キケロー選集』9（中務哲郎、高橋宏幸訳）、岩波書店、1999年、70頁。

⁶³ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.8.

⁶⁴ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.26.

⁶⁵ Apiano, *op.cit.*, 2014, p.161.

あった」と十分な防備を強調している。しかし2世紀のフロルスは「塔も城壁もないドゥエロ川に面した丘」⁶⁶に位置する無防備都市だとしている。

「自由への大いなる愛ゆえの全員集団自決」に関してリウィウスは、全員死んだのか、生存者がいたのかは明らかにしていないが、「飢餓に苛まれ、降伏する代わりに自ら死んでいった」⁶⁷としている。ストラボンそしてセネカは「偉大なるスキピオはヌマンティアを陥落させた。しかし死から逃れる者も、息を引き取るまで自由の腕にあった者の英雄的精神も偉大である」と全員による自決を否定している。2世紀のフロルスは「凱旋に連れていくためのヌマンティア人は一人も残っていなかった」と全員が自決したとしている。4世紀にフラウィウス・ウェゲティウス・レナトゥスは「ヌマンティア人はスキピオに降伏するより集団自決を選んだ」⁶⁸と歴史の劇的性格を高めるために、降伏よりも全員が死を選ぶ筋書を作った。

「野蛮であるヌマンティア」は、ローマによる文明化の使命に対する野蛮の構図において否定的要素として取り上げられた。ローマという文明に対する、ヌマンティアのカニバリズム、全てを火に投じてしまう野蛮性などについて詳述されている。アッピアノスは、「空腹と疫病のため野蛮の精神が、時間が経って戻ってきた」と以下ヌマンティアのカニバリズムについて詳細に記し「目つきが恐ろしく、怒りと痛み、疲労、他の者を食べたことを自覚していることが表情に出ていた」⁶⁹と記している。パテルクルスは「ヌマンシア人が空腹をそらせる全てのものを食し、人肉を食べつくした。後に都市が陥落した際、多くの手足や屍が保管されているのが発見された。必要性があったという言い訳は成り立たない。最終的に死ななければならないなら、このような方法で食糧を確保する必要はないからである」⁷⁰と、ヌマンシアが「祖国のために死んだ」のであれば、人肉食の必要はなく、ただ野蛮であったのだとしている。1世紀のバレリウス・マキシムスも「隷属を避けるために死ぬのであれば、このような状況で生き延びる必要はなく」「レトゲネスが居住地区に火を放った後、広場の真ん中に抜剣を置き、二手に分かれて戦うように命じ、敗北者の切った首を火に投じた。全ての者が恐ろしい死の掟で亡くなった後、自ら最後に火を放った」⁷¹と

⁶⁶ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.30.

⁶⁷ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.33.

⁶⁸ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.33.

⁶⁹ Apiano, *op.cit.*, p.172.

⁷⁰ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.33.

⁷¹ Valerio Máximo, 3, 2 (citado en Salinas de Frías, *Los pueblos prerromanos de la península Ibérica*, Madrid, 2010, p.115).

野蛮を強調するための創作を加えている。2世紀のアッピアノスは「この小さな蛮族の自由への愛はかくも大きい」⁷²が、それは「絶対的な独立といかなる者の命令に服する習慣の欠如による野蛮な精神」の表れだとしている。

このような「蛮族との対等の条約の屈辱について」は強く意識されており、2世紀のアッピアノスは「ローマと対等の条約を結んだ小邑は他にない」、フロルスは「マンキヌスとポンペイウスのみともない条約は屈辱で恥である」としている。1世紀のティトゥス・リウィウス⁷³は、「紀元前321年のサムニテスの大敗北以来の屈辱」だが、パテルクルスと同様に「それはローマ市民が恥知らずだったためではなく、ポンペイウスやマンキヌスのような將軍たちの条約のせいである」と弁明している。1世紀のプルタルコス「ノビリオルとポンペイウスとマンキヌスのワシが奪われたことは最大の恥である」としつつも、「尊敬に値する方法で召使を含めない2,000人のローマ人を救うことができた」のだとマンキヌスの交渉が人道主義的であると評価している⁷⁴。

4世紀のセクストゥス・アウレリウス・ビクトルはヌマンティア戦争における男女関係について記している。「マンキヌスがヌマンティアに現れた時、自分の美しい二人の娘を結婚させるために引き渡そうとしていたヌマンティア人と偶然出会った。娘は敵の右手を持ち帰る条件を父に突き付けた上で、承諾し」⁷⁵、女性の介在がマンキヌスの敗因となったとしている。ヌマンティアに関するこれらの注釈により、不公正で、長く、苛烈な戦争、ローマによる野蛮に対する文明化やヌマンティアの全員集団自決などは反復的なテーマとなり、「騎士道精神」と「男女関係」といった発想も既に4世紀にみられる。

4. 古代から中世における「ヌマンシア」

ローマ帝国におけるヌマンティアについての記述は、キリスト教の教父たち、そして西ローマ帝国崩壊後の中世イベリア半島でどのように解釈され、再構築されていたのだろうか。ここでは410年から1385年までの、5世紀のアウグスティヌスとオロシウスの叙述が中世における「ヌマンシア」の礎となり、踏襲

⁷² Apiano, *op.cit.*, p.171.

⁷³ 「リビウスによりメキシコのパンチョ・ビリャに当てはまるような言葉で描かれた人物であるが、一羊飼いが密猟者になり、盗賊になり、遂に陸軍司令官になって、ローマを八年間（紀元前147－139年）もスペイン西部に近づけなかった」トレンド（丹羽光男訳）『スペイン文明史』みすず書房、1970年、11頁。

⁷⁴ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.31.

⁷⁵ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.29.

され続けることで軌を一にしている期間のヌマンシアについての叙述をみていく。

聖アウグスティヌス、そしてオロシウスは、ローマに対して烈しい辛辣な批判を加えた⁷⁶。410年に聖アウグスティヌスは、邪悪な神、異端を奉じるローマを批判し⁷⁷、ローマを批判する文脈において「恐るべき恥辱で汚されたヌマンティアとの協定について触れて」⁷⁸いる。5世紀のオロシウスは、中世キリスト教イベリア半島諸王国における言説の基礎を形成する。まず「隷属を拒否した全員自決」が確定し、「一人のヌマンティア人も勝者により鎖につながれなかった *Unum Numantium victoris catena non tenuit*」「ヌマンティア人はスキピオに降伏するより集団自決を選んだ」とし、ヌマンティアが不敗であったのは「調和によるもの。不調和は破滅であった」としている。「不当な戦争」について、グラックスとの条約やマンキヌスとグラックスへの対応を絡めて「他の者に対しても自分自身にあるように忠実だった。そのように条約を結んだのだから、自由なままにさせておくべきだった。マンキヌスの懲罰を受け入れなかっただけで十分な証左であろう」⁷⁹としている。また城壁の有無については、3,000歩周囲の城壁のみがあった⁸⁰とし、防備の弱いヌマンティアへのローマの攻撃の卑怯さが強調されている。このようにローマ時代に英雄視されてきたスキピオ像やローマの栄光は、ヌマンティアを主体とした解釈へと移り変わっていく。

オロシウスが中世において最大の影響を及ぼしたのはヌマンティアの所在地についてである。「ヌマンシアの位置は、ヒスパニア・キテリオールのウェッカエイ族の領域から遠くないカンタブリアとガラエキラの境であった」としている。旧いキテリオールはタラコネンシス、カルタヘネンシス、ガラエキアに分けられており、オロシウスは、ディオクレティアヌス帝の時代のキテリオールとウルテリオールの変更後の管区に基づいて、ヌマンシアがガリシアとカンタブリアの境界にあったと判断し、今日のサモラに位置すると誤解した。このオロシウスの解釈以降、ヌマンシアはソリアではなくサモラにあるという認識が主流となる。

⁷⁶ トレンド（丹羽光男訳）『スペイン文明史』みすず書房、1970年、18頁。

⁷⁷ アウグスティヌス（赤木善光、泉治典、金子晴勇訳）『アウグスティヌス著作集』第11巻、教文館、1980年。

⁷⁸ アウグスティヌス、前掲書、221頁。

⁷⁹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.41.

⁸⁰ Jimeno Martínez, A., y Tabernero Galán, C., "Origen de Numancia y su evolución urbana", *Complutum Extra*, 1, pp.415-432, p.418.

レコンキスタ期に入ると、イスラムによる征服以前からのキリスト教諸王国によって支配されていたとして、古くからの支配権を主張するためにヌマンシアを利用される。911年の『アルフォンソ3世年代記』では、884年のアルフォンソ1世のサモラ占拠についてが「今日サモラと呼ばれるヌマンシア」に言及されている。893年にアルフォンソ3世はサモラを再征服し、911年にガルシア1世は、サモラに宮廷を移し、キリスト教諸王国において高まるサモラの重要性から、アラウワキ族の古都との連続性が主張された。同時に10世紀始めにはヌマンシア司教区（Obispado Numantino）が創設され、オビエド司教ロドリゴ（聖アティラノ）が初めてヌマンシア司教（Episcopus Numantinus）を名乗った⁸¹。975年にレオン王ベルムード2世が「現在サモラと呼ばれている都市ヌマンシアにおいて」と記した。アルフォンソ7世は「スキピオ・アフリカヌスが破壊したサモラを回復した」⁸²と古都の再征服について述べている。

しかし、1061年にカスティーリャ伯サンチョ・ガルシアとナバラ王サンチョは「古きアラウワキ族の後継であるガライ（バスク語で「焼かれた」の意）を境界域とする」⁸³とし、サモラではなく、ヌマンシアの遺跡や墳墓が出土した現在のソリアがヌマンシアだとする新たなそして正しい認識も生じている。しかし、ヌマンシアがソリアであるという認識はまだ主流とならず、1072年3月4日にサンチョ2世がサモラの包囲戦に際し、「サモラは一時間で得られない」の言を残し、包囲戦に耐えたかつてのヌマンシアはサモラにあるとした。12世紀のアルフォンソ7世は「ヌマンシアに聖なるサモラ教会を建て」た。レコンキスタの進展により拠点としての重要性が低下した13世紀においてもヒメネス・デ・ラダは『世界年代記』で、サモラが「スペインの」ヌマンシアだと、引き続き記述している。このようにレコンキスタ期には、再征服された重要な古都である高貴で古いサモラの伝統的なイメージを強化し、貴族や聖職者たちがヌマンシアの後継者を自認していたことが窺える。

賢王アルフォンソ10世は、1270年にオロシウスに依拠した『第一総合年代記』そして『歴史』を編纂し、「サモラはローマに対し蜂起し、マンキヌスの屈辱はサモラの城壁の前で起こった。執政官スキピオはサモラを征服するために派遣された。プブリウス・コルネリウスが今日ヌマンシアと呼ばれているサモラに到着した。かくも勇猛で戦うものは他にはおらず、正義、忠誠、強さ、慈悲を

⁸¹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.43.

⁸² Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.44.

⁸³ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.45.

備えていた。サモラ人は自らの武器で自らを殺し、誰もそこから逃れず、多くのよき物を全て焼いてしまったため残らなかった。スペイン人が都市サモラのことを聞いたとき、そこは破壊されており、大きな恐怖を感じ、誰もローマ人に反乱を起こそうとはしなかった」⁸⁴とまとめている。また、これまで屈辱とされてきたマンキヌスの条約を評価している⁸⁵。この反ローマの勇猛果敢で全てを焼き払い全員集団自決したサモラのヌマンシア人像については、15世紀まで大きな異論は出ない。

14世紀にフランシスコ会のフアン・ヒル・デ・サモラは、誇張した逸話を加える。紀元前714年－617年の「ヌマ・ポンピリウスに因んでヌマンシアの名がつけられた」とヌマンシアの創設をずっと古いものとし、「ジュリアス・シーザーがこの都市に遭遇した際、Cesaris moraからÇamoraとなった」と有名な英雄と関連付けている。同じくサモラの名の由来として「ポンペイウスの娘サラがヌマンシアとの仲介に立ったことから、Zara al de Roma, Zara RomaからZamoraとなった」⁸⁶とヌマンシア戦争における女性の介在と共に記している。これらサモラの権威づけは、レコンキスタ末期にサモラの重要性が低下した後も、「古く高貴な都市サモラ」⁸⁷と見なされる所以となる。また、4,000人のヌマンシア人が60,000人のローマ人と戦わなければならなかったとし、弱者対強者の図式にありながらもローマを勝利させなかったヌマンシアという像も確立していく。オロシウスによって既に小さくされた城壁については、「とても小さいもしくは城壁がなく、小さな塔を建てなければならなかった」とされ、無防備で、塔が存在していることになっている。また「ローマに貢納しながら生きるくらいなら自決し、ローマ人がヌマンシア陥落によって得たものはただ安全のみで、勝者の鎖は一人のヌマンシア人も縛ることはなかった」と全員が自決したとしている。なおカニバリズムについては一切触れられず、野蛮のイメージはかき消されている。

1385年にはアラゴン人のフアン・フェルナンデス・デ・エレディアが『スペイン大年代記』⁸⁸で「自由のために危険や貧しさに耐え、名誉を重んじ、ローマ

⁸⁴ Alfonso X el sabio, *Primera crónica general de España* (ed. Menéndez Pidal, R.), Madrid, 1955, p.47.

⁸⁵ Alfonso X, *op.cit.*, p.45.

⁸⁶ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.47.

⁸⁷ *Crónica anonima de Enrique IV de Castilla 1454-1474* (ed. Sánchez-Parra, M.P.), II, Madrid, 1991, p.167.

⁸⁸ Fernández de Heredia, J., *La Grant Cronica de Espanya Libros I- II. Edicion segun el manuscrito 10133 de la Biblioteca Nacional de Madrid*, Uppsala, 1964 (citado en Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.49).

に屈せず、蜂起した。その中にルシタニア出身のバリアートという羊飼いがいた。執政官スキピオ・アフリカヌス2世がバリアートとルシタニアに対して派遣された。ヌマンシアはそのころまだルセナと呼ばれており、現在の強大な都市サモラのことである。全ての場所に母が子や夫を焼く大いなる痛みがあった。スキピオによる非人道的で残酷な状況から一人の若いヌマンシア人が逃げた。ローマ人は名誉をもって受け入れ、ローマに凱旋する車の前に連れて行った」と改作している。ここで、ローマに対して戦う羊飼いのバリアートに光が当てられ、悪しきスキピオの迫害から一人の若者が生存し、逃げ出したことがクローズアップされる。

オロシウスの解釈に始まるキリスト教諸王国における「ヌマンシア」には、中世後期になると様々な改作や創作が加えられた。位置はサモラであると誤解され続け、無防備で、小さな塔があり、女性の存在がみられ、またカニバリズムといった野蛮のイメージは消されている。そしてレコンキスタに向けてキリスト教徒の団結を促すため「全員による集団自決」が強調され、ヌマンシアによって「全員一致団結による勝利」や「忠義・勇敢」が模範とされた。また、ルシタニアのウィリアトゥスがヌマンシアのバリアートになり、おそらくカラウニオスと呼ばれた若者レトゲネスが逃げ出すことに成功したと融合して、12歳ぐらいの男の子が逃げ出した話も創作されている。

5. ルネサンス期の「ヌマンシア」

1456年から1499年はヌマンシア表象の形成における過渡期である。レコンキスタが最終局面に入る歴史的に大きな転換期であり、また古典復興と印刷の発明によりプトレマイオスの『アルマゲスト』⁸⁹が1462年ボローニャで印刷されたことから、地理的概念が改められた。それによりヌマンシアの実際の場所が緯度41.50と経度12.30と判明した。ルネサンス期の解釈は、16世紀以降の「ヌマンシア」の認識に決定的な方向性を与えることとなる。

⁸⁹ プトレマイオス（薮内清訳）『アルマゲスト』恒星社厚生閣、1993年。



図3 プトレマイオスのイベリア半島地図⁹⁰
サモラから離れた現在のソリアの場所にヌマンツアがある。

しかし古代中世からの歴史的モジュールが、ルネサンス期の大きな変化で途切れたわけではなく、古典の新たな解釈と組み合わされるかたちで改案される。古代に目を向けられるこの時期において、ローマ帝国への関心が高まり、トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝、セネカ等がイベリア半島出身であることを挙げるなど、いかにスペインがローマに寄与したかが主張されるとともに、古代の事件が想起されるようになる。

ヌマンシアの位置については、1456年にアロンソ・デ・カルタヘナは「偉大なヌマンシアであったサモラ」とし、15世紀後半のフェルナン・ペレス・デ・グスマンが「全ての歴史において称えられしヌマンシアよ、その事績と勝利によって、その忍耐と苦難によって。スキピオによって勃発した、サモラであった戦闘は、重苦しいものだった」としており、同じく15世紀後半のパレンシアは『スペインの武勲 (*Gesta Hispaniensia*)』において、「アフリカヌスの手で破壊されたサモラとそれにより可能となったヒスパニアのローマ支配」⁹¹としているなど依然サモラ説が根強い。

⁹⁰ プトレマイオス (L. バガーニ解説、竹内啓一解説翻訳)『プトレマイオス世界図：大航海時代への序章』岩波書店、1978年、ヨーロッパ第二図、イスパニア全図と周辺諸島。

⁹¹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.54.

1470年に初めて印刷されたスペイン史であるロドリゴ・サンチェス・デ・アレバロの『スペイン史 (*Historiae hispanicae*)』は、「スペイン」の起源を探るなかで、中世の議論を踏襲し、ヌマンシア人の美徳が取り上げられている。1482年にセビーリャで印刷されたディエゴ・デ・バレーラの『スペイン略年代記』⁹²では、これまでのヌマンシアに関する叙述が以下のように総括されている。「隠れていた22歳の若者を除いては、生きているものを見つけることはできなかった。スキピオは、偉大であるべき勝利の証拠として、その者だけをローマに連れて行ったが認められなかった。スキピオはヌマンシア人に勝利したのではなく、ヌマンシアが勝利したのだと。スキピオの名誉を損なうことをよしとしなかった元老院はサモラに戻るよう命じ、力でもってそれを占拠し、ローマで凱旋するように命じた。スキピオはサモラに戻り、元老院が命じた全てのことを行った。若者が「私の先祖から勝利を得られなかったことを私によって得ることで終わらせない」と言いながら、塔の上から若者がその手に持っていた鍵を落としたのが見えた。そして塔から身を投げたため、スキピオは生涯勝利を得ることはできなかった」。ビリアートはサモラ出身であるという混乱は残るが、スキピオはヌマンシアに勝てなかったとし「武器を取らないものを全て殺し、見たものを焼いたことは世界が続く限り記憶されることである」としている。また、1495年にヘロニモ・ミュンツァーも「ペナベンテから10レグアのサモラは、古くはヌマンシアと呼ばれていた。このヌマンシアはたった4,000人の住民でローマに勇敢に抵抗し、60,000人以上のローマ兵を殺した。飢餓に悩まされ、町と自らに火を放ち、勝利者がなにか栄光を得る証拠が残らないようにした」とし、これまでの議論を踏襲している。

その一方で、ヌマンシアがサモラではなくソリアにあるという確信も強いものとなってくる。1545年まで未刊ではあるが、1482年にフアン・マルガリト枢機卿は既に「ヌマンシアはサモラの場所ではありえない」⁹³としている。1499年にアントニオ・デ・ネブリハは『スペインの古い時代の提示』において「ヌマンシアはサモラではなく、ソリアもしくはガライである」⁹⁴と明言している。

この時期はまだ中世に形成された議論が混在しているが、正確な地理的認識が広まるにつれ、ヌマンシアは徐々にサモラから現在の位置へ修正されていく。

⁹² Valera, D., *La cronica de España abreviada por Mandado de la muy poderosa señora dona Isabel, reyna de Castilla*, Sevilla, 1482 (citado en: Cervantes, M. de, *La Numancia* (trad. y notas Sevilla Arroyo, F., y Rey Hazas, A.), Alianza Editorial, 1996, p.99.)

⁹³ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.56.

⁹⁴ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, 2005, p.58.

一致団結によりレコンキスタへ向かう姿勢の模範は、対外戦争が続くスペイン帝国でも受け継がれる。またヌマンシア人の数が減り、初期中世に10対1以上あったローマ軍との差も更に広がり、強者対弱者の構図が強められている。

6. 「ヌマンシア」確立

近世以降、ヌマンシアをめぐる言説は、カルロス1世期、フェリペ2世期におけるローマの略奪やイタリア戦争を背景に、ローマと一線を画したものが主流となる。スペインの栄光を形成する主な担い手は年代記作家たちである。オcampoは、1553年に「ローマ人を相手にした勇敢さと忍耐を語る際によく知られたヌマンシア」⁹⁵、そして1574年のアンブロシオ・デ・モラレスは、ヌマンシアによって示された慈悲、正義、強さを称え、戦争の理由は条約を侵害したローマの不当さ、スペイン人を抑圧した暴政、強欲にあるとし、「そのような悪徳がローマ人の友であり同盟者たちだったのだ」⁹⁶とローマを批判し、スペインの美德を高めた。1540年のペドロ・デ・メシア、1539年のアロンソ・デ・ゲバラ、1556–1571年のエステバン・デ・ガリベイ、1546年のペル・アントン・ベウテル、1589年のフアン・デ・マリアナ、1614年のサンドバルも「(スキピオは)勝利を証明できるものを携えるに至らず、ローマはアラウアキ族に勝利しなかった」⁹⁷というように、同じ方向性で、偉大なるスペインの要素を高貴な祖先に求め、イベロ族の一致団結⁹⁸と外勢に対するスペイン的なもの (lo español, lo hispánico) の保持をヌマンシアが象徴するとした。黄金世紀の著述家と歴史家によって、民族として消滅したはずのヌマンシア人はスペイン人とされ、ヌマンシアの武勲はスペインの武勲となり、ローマは悪しき外勢であり侵略者であると解釈される。

また、ヌマンシアの位置はサモラからソリアへ移行する。1519年の系譜学者ペドロ・グラシア・デイは「高貴で忠義ある都市ソリアは、騎士道の起源であ

⁹⁵ Ocampo, F. de, *Los cinco libros primeros de la Coronica general de España que recopilava el maestro Florián Ocampo, coronista del Rey nuestro señor, por mandato de su Majestad*, Zamora, 1553 (citado en Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.56).

⁹⁶ Morales, A.de, *La Cronica General de España que continuava Ambrosio Morales, natural de Cordova, Prosiguiendo delante de los cinco libros, que el Maestro Florián de Ocampo Cronista del Emperador don Carlos V*, Alcalá de Henares, 1598 (citado en Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.56).

⁹⁷ Sandoval, P. de, *Antigüedades de la ciudad e iglesia cathedral de Tuy y de los obispos que save aya avido en ella*, Barcelona, 1980. (citado en: Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.58.)

⁹⁸ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.66-67.

る」と述べ、1539年アロンソ・デ・ゲバラは「ヌマンシアの場所がどこにあったかについて3つの意見が存在していた。一つはソリア、ほかの者は高台にある橋、ほかのものはガライである」また「私が3つの場所を知るところによると、ガライに一番信憑性がある。なぜならそこに大きな建物とみられる遺跡があるからである」「これまで言われてきたような場所にヌマンシアがあったのではない。現在のソリア、ガライである。ヌマ・ポンペイウスに因んで名がついたのだから、ヌマンシアの起源は紀元前753年である」ため、「ヌマンシアは466年間の長きにわたり繁栄を享受し、全てが破壊されたためローマは決して支配するに至らなかった」⁹⁹と概括している。1553年にタラファは、1106年のアルフォンソ7世の征服に関する記述について「スキピオ・アフリカヌスが破壊したソリアを回復した」¹⁰⁰と変更している。1577年にモラレスは、「ヌマンシアはガライの橋のところ、ソリアから1レグア半のところにある」¹⁰¹とし、ヌマンシアはソリアにあったという説が主流となる。1612年のモスケラ・バルヌエボ『ヌマンシア』の第3歌でソリアの遺跡についての詳細が語られている¹⁰²。

また城壁の有無について1542年にアロンソ・デ・ゲバラは「いかなるヌマンシア人も背を向けず、逃げるよりも死を決意した。メテッルスもポンペイウスもカエサルもセルトリウスも、パトロクロスもヌマンシアを決して征服したことはない。塔も城壁もなく溝といくつかの投石器があるだけで、いかなるヌマンシア人も囚われず466年間も繁栄を享受した」¹⁰³とし無防備都市でありながら、グレードアップされたローマの有名将校と戦ったことになり、繁栄を享受した期間もかなり長いものとなっている。1549年にペドロ・デ・メディナも城壁も塔もない無防備都市を包囲したとしている。

1573年にディモネーダは、『ロサ・ヘンティル』¹⁰⁴において、ヌマンシアがソリアにあることを前提に「炎は20日間燃え続け、樽の中に残り、炎から無事であった13歳にならない一人の少年が以外には何も残っていなかった。スキピオは、ソリアが破壊されたため、ローマに、勝利の証拠として、少年のみを連れて行ったが、勝利は否定された。元老院はスキピオにソリアに戻るよう命じる。

⁹⁹ Guevara, A. de, *Epístolas familiares* (ed. Cossío, J.M. de), Madrid, 1950, I, p.46.

¹⁰⁰ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.73.

¹⁰¹ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.73.

¹⁰² Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.77.

¹⁰³ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.93.

¹⁰⁴ Timoneda, J.De, "Romance de cómo Cipión destruyó a Numancia", *Rosa Gentil*, XVIIr-v de romances que tratan historias romanas y troyanas, (citado en: Cervantes, M. de, *La Numancia* (trad.y notas Sevilla Arroyo, F., y Rey Hazas, A.), Alianza Editorial,1996, p.99-100).

少年は逃げ出し、塔の最も高いところに上り、そこで渡すはずの鍵を手を持っていた。それを力尽くで奪おうと敵が近づいた。少年は「神がそれ以前に決して得ることのなかった勝利を私から得ないように、悪しき褒美与えないように」と言いながら塔から鍵を抱いて飛び降りた。そしてスキピオは切望した勝利を得られないままとなった」と筋書を完成させている。

1574年にフェリペ2世期の年代記作家アンブロシオ・モラレスの『スペイン総年代記』¹⁰⁵では、絶滅したアラウキ族のヌマンシアの戦争が、スペインの戦争であると解釈され、古代の一地方の戦争がスペイン帝国全体のものへと拡大している。またハプスブルク朝スペイン帝国がローマ帝国と重ね合わされ、属州ヒスパニアから相続した文学的かつ考古学的なつながりを見出そうとし¹⁰⁶、15世紀以降、スペインの王朝的統合を背景に古代ローマ帝国領ヒスパニアにスペイン共通の地理的概念¹⁰⁷を求められ始めたことから、スペイン文化形成の第一歩はローマ化であるとする説も現れる。

このようなヌマンシア解釈が展開し国民文学が登場する80年代に、セルバンテスが戯曲『ヌマンシア』を執筆した。この戯曲が書かれたのが、ポルトガル併合直後で、無敵艦隊が敗退する前であるため、スペイン最盛期の帝国概念が顕著に表れているとされている。スペインの起源を、神聖ローマ帝国¹⁰⁸そしてローマ帝国であるとし¹⁰⁹、*Pax Romana*と、カトリックによる*Pax Hispanica*が対比され¹¹⁰、対外戦争におけるスキピオの軍事的リーダーシップが¹¹¹、1560年代から70年代にかけてのフランドルの反乱におけるアルバ公やレバントの海戦のドン・フアン・デ・アウストリアに重ねられていることを指摘する研究が主に英語圏でみられる¹¹²。それに対して、当時のスペイン帝国を皮肉っているとして、1527年のローマの包囲と、1576年のアントウェルペンの包囲といったフェ

¹⁰⁵ Morales, A.De, *La Cronica General de España que continuava Ambrosio Morales, natural de Cordova, Prosiguiendo delante de los cinco libros, que el Maestro Florián de Ocampo Cronista del Emperador don Carlos V*, Alcalá de Henares, 1598.

¹⁰⁶ Sánchez Madrid, S., *Arqueología y humanismo: Ambrosio de Morales*, Córdoba, 2002, p.39.

¹⁰⁷ エリオット（藤田一成訳）『スペイン帝国の興亡』岩波書店、1982年、9－10頁。

¹⁰⁸ MacCurdy, R.R., “Prólogo” of *Numancia cercada y Numancia destruida*, Madrid, 1977, p.xxi.

¹⁰⁹ Dandalet, T.J., *Spanish Rome: 1500-1700*, Yale UP, 2001.

¹¹⁰ Walzer, M., *Just and Unjust Wars: A Moral Argument with Historical Illustrations*, New York, 2006.

¹¹¹ Schmidt, R., “The Development of Hispanistas in Spanish Sixteenth Century Versions of the Fall of Numancia”, *Renaissance and Reformation*, 19. 2, pp.27-45, p.38.

¹¹² 南川高志『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』岩波書店、2003年。イギリスにおいて、植民地を文明化し、インド総督を属州総督になぞらえるなどして、大英帝国が自らをローマ帝国と同一視する、ハヴァフィールドなどによるローマ帝国による文明化*Romanization*と野蠻の構図が強く意識されている。

リペ2世の圧政¹¹³や、スキピオの包囲を通して、スペイン帝国の軛における不当なポルトガル併合とアメリカの原住民の苦しみを批判しているとし、パルドキシカルに帝国主義と反帝国主義が併存していることが、セルバンテスの『ヌマンシア』の多義性である¹¹⁴とするやや強引な見解もある。

アントニオ・レイは、セルバンテスがローマ帝国に同調し、ローマ帝国の後継者としてスペイン帝国を復興させるという見解について、「最悪の敵であるローマ帝国を受け継ぐことがあろうか？ 包囲戦を謀り、ヌマンシアの虐殺という悲劇の直接の原因がローマであることを忘れたのか？ 誰も混乱しないように、和解不能な敵とヌマンシア人は分けられており、ヌマンシア人たちは常にスペイン人たちと呼ばれている。それでもスペイン人はヌマンシア人ではないのか？ 敵対するローマ人とその帝国とスペインが一つになるというのか？ なんと厄介な解釈だろうか！ セルバンテスはそのようなことは何も述べていない」¹¹⁵と完全に否定している。

セルバンテスの『ドン・キホーテ』の多義性ゆえに、『ヌマンシア』についても様々な見方がされている。セルバンテスは『ヌマンシア』の中で、実際にスキピオが勝った一騎打ちについては、スキピオが断ったことにし、アウアルスといったスキピオへの使者をヌマンシアが殺していることについては触れないなど、ヌマンシア側に都合よく書き直している。スキピオを称えるにしてもそれは敵の手強さを強調することで、精神面でのヌマンシアの勝利の価値を高めるためである。ローマとの連続性が念頭にあるのであれば、ヌマンシアではなく、ヒスパニアを取り上げているだろう。セルバンテスは、スペインはヌマンシアの名において、未来で借りを返すという主旨で、カルロス1世とフェリペ2世に言及しているのであり、ローマ帝国をスペイン帝国になぞらえているわけではない。

この時期に外国の戦争という政治的現実から「包囲にあっても不服従で死を恐れず、支配されないよう全てを燃やす集団的英雄性」と、スペインがヨーロッパで最も古い国家を称するための起源としてスペインの事績にとりこまれたヌマンシアの梗概が確立したといえる。16世紀を通じてヌマンシアはスペインの永遠に記憶されるべき普遍的な高貴な過去の名声となり、その確立した内容は

¹¹³ Watson, A., *Juan de la Cueva and the Portuguese Succession*, London, 1971, pp.54-55.

¹¹⁴ Kahn, A.M., *The Ambivalence of Imperial Discourse: Cervantes's La Numancia within the 'Lost Generation' of Spanish Drama (1570-90)*, Peter Lang, 2008.

¹¹⁵ Cervantes, M. de, *La Numancia* (trad. y notas Sevilla Arroyo, F., y Rey Hazas, A.), Alianza Editorial, 1996, p.99-100), p.XXIX.

流布され「無敵のヌマンシア *la invencible Numancia*」はロマンセーロ¹¹⁶で歌われている。

この後スペインが二流国へ転落した衰退期にあって、「ヌマンシア」はノスタルジックに文学文化に反映され、作り話が増えていく。しかし、啓蒙の世紀の国際的な要請により、信頼できる歴史の不在への批判と、史実でないものを排除する圧力から、古代史にない話は削除され、城壁の不在のくだりについても消滅する。しかし、ヌマンシアは愛国的なテーマであり続け、フェルナンド美術アカデミーでは愛国的なテーマとして課題にヌマンシアが選ばれ、1784年に初めてセルバンテスの『ヌマンシア』が印刷される。1902年にはソリアでヌマンシアの遺跡発掘が本格的に始められ、ヌマンシア博物館が整備される¹¹⁷。このように「ヌマンシア」は、スペイン性を表す手立てとして、今日に至るまで整えられてきたのである。

7. おわりに

本研究では、セルバンテスの『ヌマンシア』だけでは説明できない、「ヌマンシア」の普遍性の所以についてみてきた。ローマ帝国末期における過去の栄光を叙述するモチーフとして、イベリア半島のレコンキスタ期におけるイスラム侵略前からの古い支配権の主張や一致団結して異教徒に立ち向かう姿勢の模範、ルネサンス期における創作、黄金世紀におけるスペイン性の確立の文脈において、「ヌマンシア」は再解釈され、翻案されてきた。16世紀にシノプシスが出来上がったヌマンシアの抵抗の物語は、スペインにおいて自由主義者の旗印として、そしてナポレオンやファシズムによる包囲戦、そして現代においても自由が危機に晒される際に想起される表象となった。このような歴史的解釈の経緯における可変性を踏まえたうえで、ヌマンシアというモジュールを明らかにすることにより、スペイン文化をより幅広い文脈で理解できるのではないだろうか。

¹¹⁶ *Romancero general* (1600, 1604, 1605) (ed. González Palencia, A.), II, Madrid, 1947, p.131 y pp.174-175.

¹¹⁷ Jimeno Martínez, A., y De la Torre Echávarri, J.I., *op.cit.*, p.105-155.